

五雲会

平成三十年五月十九日(土) 正午始

演目の解説

籠 シテ藤井 秋雅

ワキ 館田 善博

大鼓 亀井 洋佑
小鼓 住駒 匡彦

笛 熊本俊太郎

後見 大坪喜美雄
高橋 亘

地謡

金 隆 晋
佐 野 弘 宜
敷 井 克 徳
亀 井 雄 二

小倉伸二郎
藤井 雅之
佐野 登
小林 晋也

呼 声

山本 則重

山本 則秀
山本 泰太郎

雲雀山 子方水上 優嘉
シテ水上

ワキ 御厨 誠吾

大鼓 飯嶋六之丞
小鼓 清水 和音

笛 槻宅 聡

間 山本 則俊
山本 泰太郎
若松 隆

後見 朝倉 俊樹
山内 崇生

地謡

上 野 能 寛
辰 巳 和 磨
當 山 淳 司
東 川 尚 史

渡邊 茂人
大友 順
小倉 健太郎
和久 莊太郎

へ休憩十五分

石橋 ッレ今井 基
シテ辰巳大二郎

ワキ 工藤 和哉

大鼓 大倉慶乃助
小鼓 森澤 勇司

太鼓 大川典良
笛 小野寺 竜一

後見 宝生 和英
野月 聡

地謡

金 井 賢 郎
田 崎 甫 郎
金 森 良 充
佐 野 玄 宜

東 田 光 夫
武 田 孝 史
今 井 泰 行
澤 田 宏 司

終演予定 午後四時五分頃

籠「籠」(えびら)

旅の僧が須磨の生田川に通るかかり、今を盛りと咲く梅の木を眺めていると、若い男に出会った。僧が梅の木の名前を尋ねると男は「籠の梅」という名で、自分が付けた名であると答えます。そして生田の森の合戦に、源氏方の梶原源太景季が籠に挿した紅梅を笠印として奮戦したことを詳しく語り、自分はその景季の幽霊であると明かして消え去ります。その夜の僧の夢に景季が若武者の姿で現れ、在りし日の戦さを再現し、供養を頼んで去って行きます。

狂言「呼声」(よびこえ)

太郎冠者の無断欠勤に怒った主人は、次郎冠者を供に連れて、太郎冠者の家へ乗り込みます。調子のよい太郎冠者は、さまざまな手で居留守を使います。太郎冠者を叱りに行ったはずの主人、しかし「平家節」「小唄節」「踊り節」など太郎冠者が次々繰り出す楽しいメロディとリズムについて引き込まれ、怒りも忘れ夢中になって三人で浮かれてしまうのです。謡の芸づくしの応酬で舞台は広がり、思わぬ展開をむかえます。

籠「雲雀山」(ひばりやま)

右大臣豊成はある者の讒言を信じて、我が子中将姫を殺せと命じます。臣下は姫に同情して、雲雀山に姫を連れて行き、乳母の侍従を世話役につけて草庵に住まわせます。侍従は草花を採り里へ出てそれを売って姫を育てていましたが、あるとき豊成一行に出会います。豊成は讒言を信じた事を後悔して、臣下から姫が生きていることを知り、雲雀山にやって来たのです。初めは信じなかった侍従でしたが、豊成の涙を見て、最後には姫を引き合わせ、親子共々めでたく去って行きます。

籠「石橋」(しゃっきょう)

大江定基は出家して寂昭法師と名乗り、唐に渡り清涼山に至り、文殊の浄土へ懸かる石橋のもとに着きます。そこに通りかかった樵童は、寂昭が渡ろうとするのを止め、橋の謂われを語り、渡ることの困難さを示し、やがて奇蹟を見ることになるだろう、暫くここで待てと告げて去って行きます。すると荘厳な音楽が始まり、文殊菩薩の霊獣である獅子が現れ、豪快に獅子舞を舞います。

次回予告

平成三十年六月十六日(土) 正午始

杜	八	養
若	島	老
野	佐	辰
月	野	巳
聡	弘	和
	宜	磨



◎入場料 一般 / 5,000円
学生 / 2,500円

◎会場 宝生能楽堂

J R水道橋駅東口 徒歩3分
都営地下鉄三田線 水道橋駅
A1出口 徒歩1分

☎113-0033
東京都文京区本郷1-5-9